

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

全学教務委員会数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門部会

(責任者名) 中野紀和

(役職名) 副学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>本プログラムを構成する全学共通科目「データサイエンスA」の履修・修得状況については、学務課および東松山教務事務室において厳密に管理されている。これらの実績データは「数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門部会」において定期的に共有・分析され、プログラムの有効性の検証および次年度の情宣活動や授業改善の基礎資料として活用している。</p> <p>開設初年度である2024年度の実績は以下の通り。 ・履修登録者数: 延べ234名(前期89名、後期145名) ・単位修得者数: 延べ173名(前期70名、後期103名) ・単位修得率: 前期 78.7%、後期 71.0% また、2025年度からは受講対象年次を拡大した結果、履修者数が大幅に増加しており、前期320名、後期486名(計806名)が履修する規模へと急成長している。</p>
学修成果	<p>本プログラムを構成する「データサイエンスA」の履修を通じて、学生は「数理・データサイエンス・AIの社会的価値の理解」および「データを客観的に読み解き、活用する基礎能力」を確実に修得している。本学の教育の特徴であるオムニバス形式のケーススタディ(スポーツ、健康、言語、歴史等)により、学生は自身の専門分野や関心事項とデータサイエンスの密接な関連性を理解し、単なる数字の集まりではなく「社会課題を解決する強力な道具」としての視点を獲得している。</p> <p>2024年度の成績分布状況の分析によると、単位修得者の平均得点は前期81.9点、後期83.4点と非常に高い水準にあり、多くの学生が各回で課される演習や課題を意欲的にこなしている。この成績水準はプログラムが期待する能力を多くの学生が十分に身につけたことを示す客観的な指標であると認識している。また、単位修得者の約7割から8割という合格率は、授業内容の適切さと学生の理解度の高さを示している。</p> <p>オンデマンド形式という特性上、質問機会の確保などの課題は認識されているものの、概ね良好な修得状況であり、本プログラムが掲げる能力目標(データ思考の涵養)を多くの学生が達成していると評価している。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>毎期末に実施しているアンケートの結果、自身の成長(知識の増加、ものの捉え方の深化、技能の向上)について、「強くそう思う」または「どちらかと言えばそう思う」と回答した学生の割合は、2025年度前期で86.4%、2025年度後期で85.5%と、極めて高い水準を維持している。また、授業の難易度についても、約8割から9割の学生が「適切」あるいは「やや難しかったが許容範囲」と回答しており、文系学部の学生を中心とした受講生に対して、適切なレベルでの教育が提供されていることが確認できる。</p> <p>学生の自由記述からは、以下の要素が内容の深い理解に寄与していることが明らかになった。 ・視覚的・反復的な学習: 「スライドと動画を併用することで、内容を深く理解できた」「オンデマンド形式のため、わからない箇所を何度も見返して確認できる」といった、デジタル教材の利点を活かした学修が定着している。 ・実践的な演習: 「Excelを使って実際に手を動かすことで、映像を見るだけでは理解できなかった部分が身についた」という意見が多く、理論と実践の組み合わせが理解度を押し上げている。 ・専門用語の平易な解説: 「データサイエンスに全く知識がない自分でもわかるように、わかりやすく説明されていた」と、初学者への配慮が理解を助けている。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	<p>2025年度後期の期末アンケートにおいて、「この授業を後輩など他の学生に薦めたいと思うか」という設問に対し、「強くそう思う」および「どちらかと言えばそう思う」と回答した学生は86.8%に達した。この高い推奨度は、授業全体の満足度(満足・概ね満足が89.5%)と強く相関しており、学生が本プログラムの価値を高く認めていることを示している。</p> <p>学生が他者に受講を勧める主な理由として、以下の点が挙げられている。 ・将来の有用性: 「これからの情報社会を生きるにあたって必要なことを知れた」「将来どの職業に就いても役立つ実践的なスキルが得られた」と、キャリア形成における必須科目を推奨する意識が働いている。 ・興味の広がり: 「スポーツやことばなど、身近な事例からデータサイエンスを学べるのが面白い」「自分の専門以外の分野を知る良い機会になる」と、知的好奇心を刺激する内容が他者への推奨に繋がっている。 ・学修の利便性: 「オンデマンドなので自分の好きな時間に、自分のペースで学べる」という柔軟な受講形態も、多忙な学生生活を送る後輩に勧めたい要因の一つとなっている。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況</p>	<p>本プログラムの構成科目である「データサイエンスA」は、2024年度入学生の教育課程から新設された1年次の選択科目である。開講初年度となった2024年度は、主に1年生を対象とした履修勧奨となったため、全学生に対する履修者数は230名程度にとどまった。しかし、学部・学科によって履修者数にばらつきは見られるものの、2025年度から受講対象年次が拡大した結果、履修者数は前年度の約3.5倍（年間約800名規模）へと急増している。</p> <p>年次進行に伴い、全学的な履修者数を2027年度は900名程度を想定している。</p> <p>できる限り多くの学生が本プログラムを履修し、修得できるよう、履修ガイダンスや本学ポータルサイトを通じて学生へ周知している。また、全学部の学生が時間や場所の制約なく受講できるよう、授業形態をフルオンデマンド形式としている。これにより、他学部科目の履修や課外活動との両立を容易にし、履修のハードルを下げている。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p>	<p>本プログラムの構成科目である「データサイエンスA」は2024年度に新規開設された科目であり、現時点において本プログラムを修了し、卒業した学生はいない。今後は、キャリアセンターと連携し、本プログラムで習得した数理・データサイエンス・AIの素養が実社会でどのように活用されているかについて、卒業生や就職企業へのアンケートやヒアリングを実施する計画を立てている。</p> <p>本プログラムでは、産業界や実社会でのデータ利活用を強く意識したオムニバス形式のケーススタディ(スポーツ分析、需要予測、ビジネスDX等)を導入している。今後は「数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門部会」において、学外の有識者や産業界からの意見を聴取する機会を設けることで、プログラムの質維持・向上を図る予定である。</p>
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本プログラムでは、学生が自身の専門分野や日常生活との接点を見出せるよう、本学の多様な研究領域を活かしたオムニバス形式のケーススタディを軸に展開している。具体的には、スポーツ、健康、言語、歴史(漢字データベース)など、文系学生にとっても身近で興味関心の高いテーマを各回の授業で扱うことで、「データサイエンスは理系のもの」という先入観を払拭し、学ぶ楽しさを実体験させている。学生アンケートでは、「スポーツとデータサイエンスの意外な結びつきに驚いた」「自分の志望進路(銀行員や教員等)におけるデータの有用性に気づいた」といった声が多く寄せられている。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>教育の質と分かりやすさを両立させるため、フルオンデマンド形式の利点を最大限に活用している。具体的には、視覚的に整理された講義資料(スライド)と解説動画を併用し、学生が自身の理解度に応じて繰り返し視聴・復習できる環境を整えている。さらに、以下の取組を通じて継続的な授業改善を行っている。</p> <p>多角的なフィードバック: 毎学期実施する授業認識アンケートを詳細に分析し、学生から指摘された「音声の聞き取りにくさ」や「専門用語の解説」等の課題に対し、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門部会」で検討し、迅速に改善を図る。</p> <p>進化への対応: 日々変化するAIの発展や社会実装の状況も踏まえて、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム専門部会」にて、組織的な点検を行い、内容の見直し、教育水準の維持・向上に努める。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>